

# デジャルマ・ギマラエス 小伝

Djalma Guimarães



デジャルマ・ギマラエス氏は、1894年11月5日ブラジル生まれ、リオデジャネイロのペドロ・セグンド学院、およびオウロ・プレット大学にて人文科学課程を修了した。その後オウロ・プレット鉱山大学に入学し、1919年卒業した。卒業後数ヶ月間旧テレボリス鉄道の建設に携わった後、ブラジル地質学・鉱物学研究所地質業務実験所に化学者として勤務した。1923年、常任研究員となり複雑な岩石顕微鏡の操作技術を確立した。

岩石学においては、1938年花崗岩化理論を提唱し、花崗岩の起源に関する論争を再開させた。また同年、地球化学の揺籃時代、新しい鉱床生成学理論を提起した。

ブラジルでのアルカリ岩を研究中、これら岩石の起源についての理論を提唱した。また総鉛量法により、ブラジルの地質年代学的調査のパイオニアとなった。さらに氏は大陸移動説の熱心な擁護者であり、地質年代学の大量の文献を調査し、1971年、いかにして、ゴンドワナ大陸の解体が発生し、ギアナ盾状地と衝突して南米大陸となるかの軌跡のモデルを提唱した。

鉱物学分野では *eschweita*、*arrojadita*、*giannettita*、*pennaita* など種々の新しい鉱物を発見した。また多数の鉱床の採掘、開発、近代的鉱物処理法を導入した。

経済地質学の分野では、空中物理探査法を史上初めて成功させブラジル・ミナス・ジェライス州アラシャのリン灰石及びパイロクロアの岩層を発見した。この岩層の中には Nb 酸化物が多量に含まれており、その後 CBMM 社の鉱源として採掘され現在に至っている。

化学の分野では、ブラジルに光学分光法、岩石分析の近代的技術を導入した。1945年、国家鉱産局から離れ、ベロ・オリゾンテに移り、ミナス・ジェライス州の鉱物利用の開発の基礎を固めた。氏は永眠する1973年までこの地で研究活動を続け、最後に発注した最新の顕微鏡が彼の手元に届いたのは死の数時間前であったと言われている。

氏はブラジル地質学会初代会長で、フランス地質学会の副会長、地球化学及び宇宙化学誌の審議会員などの要職を勤め地質学の発展に大きな足跡を残した。平成14年CBMMアジア株式会社より本会に対してニオブに関する顕著な研究を表彰するための資金提供の申し出があった。

本会は、平成15年度よりこの資金をもってギマラエス賞を設け、ニオブに関する論文のうち学術上、技術上最も有益なものに同賞を授与することとした。